

学校保健活動と健康優良学校

— 5年連続日本一に表彰された愛知県下5小学校の活動をとおして—

松井 利幸

Some Aspects of the School Health Activities Considering the Typical Examples of 5 Elementary Schools in Aichi Prefecture

Toshiyuki MATSUI

はじめに

昭和51年度から55年度にいたる5年間に、愛知県からたて続けに健康優良学校日本一が生まれた。同一県でのこうした実績は過去にはなく、受賞した当該校はもちろん、愛知県下の他の教育現場や学校保健に携わる者にとって大きな誇りと自信がわいた。そしてこの火を絶やさず今後ますます発展させてゆこうとする気運が高まっている。

本稿では、なぜこのようになってきたのか、健康優良学校表彰制度とはなにか、それが学校保健活動ひいては学校教育とどのように関連しているのかについて、各表彰校の具体的な活動をとおして検討したい。

1. 健康優良学校表彰制度について

健康優良学校表彰に先行するものとして「健康優良児童」の表彰が行われていた。これは本テーマとは直接関係しないが、健康優良学校表彰の発足および発展に深い関係があるので触れておく。健康優良児童は各都道府県から複数（後年は1名）の児童を選んで中央で審査し、男女1名ずつの「日本一」、男女数名の「特選」児童を表彰するものであり、昭和5年に朝日新聞社の主催で始められた。⁽¹⁾途中、昭和17年から中断されたが戦後24年に復活した。⁽²⁾そして昭和26年、児童個人の表彰だけでなく集団としての学校表彰の部門が新設された。これは敗戦後の日本の学校教育の復興と、新聞社による表彰という一種のコンクールではあるが、学校教育への健康教育の位置づけを明確にうちだしたのものとして大変意義がある。こうした

主旨に賛同し文部省および厚生省が後援している表彰制度である。その後も個人と学校の二頭だての表彰が続いたが、昭和54年度からは個人表彰を廃止した。この背景としては、あくまである地域・年度に限って偶発的に現われたほんの一部の児童を表彰することの教育的意義、また表彰された児童たちのその後の成長が果たして優れているかどうかの曖昧さのためと考えられる。

健康優良児童表彰の廃止にかわって、昭和54年度から健康優良学校表彰の枠を広げた。すなわち、従来までの大規模校（全校12学級以上）、小規模校（同11学級以下）の2部門だけであったのに、中規模校の部（同7学級以上18学級以下）を増設した。これにより小規模校は6学級以下、大規模校は19学級以上となり、わずか数学級の学校から40学級を越すようなマンモス校の応募もより可能となった。このことは多くの学校に応募意欲をもたせ、学校保健活動の活潑化を促す新制度といえる。

この健康優良学校の応募システムは、各年度ごとに、各都道府県単位で応募するものである。愛知県の場合、県の教育委員会（保健体育課）が中心となって学校規模別に1校ずつ最大3校を絞り、書類で中央に提出、応募する。中央では依頼された20数名の専門委員が書類審査し、各規模別に5校の「全国優秀校」を選び出す。そして最終的にはその5校について実際に学校を訪問し（実地審査）、「健康優良学校全国特別優秀校」（旧＝日本一）を決定するしくみになっている。審査委員によると、書類審査でのランクが実地審査でかなり逆転するようである。なお、健康優良学校表彰

の観点は次のようである。

児童、教職員、家庭、地域社会のらびとが協力して、学校保健委員会などの組織活動をはじめ、疾病予防や環境衛生などの保健管理活動、保健学習や精神衛生などの教育活動を積極的に行い、地域の実態に即した独自の工夫と努力をはらって児童の心身の健康づくりに意欲的に取り組んでいる（全国の）学校。

—朝日新聞、1980年(昭55)5月25日付朝刊—

2. 連続表彰された5小学校の教育活動について

まず、連続表彰を受ける前の過去の愛知県の実績について触れてみたい。表1は昭和26年から昭和50年までに表彰された学校を列挙したものであるが、日本一になったのは3校、特選8校の計11校である。この数は特に盛んな香川県（26校）、島根県（20校）、新潟県（18校）につぐものとしてランクされ、愛知県には5年連続日本一を輩出するという偉業を達成する土壌はあったといえる。

表1. 過去の表彰校一覧（愛知県のみ）

年度	校名	規模	表彰
26	若園小学校(豊田市)	大	特選
28	米野小学校(名古屋市)	大	特選
	常磐小学校(岡崎市)	小	特選
30	米野小学校(名古屋市)	大	日本一
34	千郷小学校(新城市)	大	特選
35	新川小学校(碧南市)	大	特選
37	日進小学校(碧南市)	小	特選
38	鳴海小学校(名古屋市)	大	特選
	御津北部小学校(宝飯郡)	小	日本一
43	羽根井小学校(豊橋市)	大	日本一
49	連尺小学校(岡崎市)	大	特選

1) 連続表彰5校とそれぞれの教育目標について 健康優良学校日本一を受章した5つの小学校を表2に示した。学校規模はさまざまであるが、県下でも大都市である名古屋市周辺から西にはなく、三河地方と呼ばれるところから出ている傾向が強い。

こうした健康優良学校の教育目標をみると（表

表2. 5年連続受賞した愛知県の健康優良学校

昭和51年度 健康優良学校 日本一 (小規模校)	昭和52年度 健康優良学校 日本一 (大規模校)	昭和53年度 健康優良学校 日本一 (大規模校)	昭和54年度 健康優良学校 全国特別優秀校 (中規模校)	昭和55年度 健康優良学校 全国特別優秀校 (大規模校)
東加茂郡下山村立 はなやま 花山小学校	瀬戸市立 しもしなの 下品野小学校	豊川市立 てんのう 天王小学校	豊田市立 もとしろ 元城小学校	岡崎市立 おかざき 岡崎小学校
5学級 58名	22学級 750名	15学級 491名	12学級 452名	22学級 835名

3参照)、知的・情緒的な面にもまして、“健康”“体力”“たくましい”という言葉がいずれの学校にも掲げられている。しかし、このことが「さすが健康優良学校日本一ならでは……」というものでは決してない。教育目標とは、各学校が実状

にあわせて独自に設定するものであるが、事実、筆者らの調査では愛知県の小学校のうち約9割が、⁽³⁾中学校では約8割の学校が表現の差こそあれ“健康”を教育目標に掲げているのが実態である。これは愛知県だけの傾向ではなく、全国殆どの学校

表3. 健康優良学校の「教育目標」

<p>①花山小</p>	<p>「強い意志と、たくましい体力」そしてみんなで協力し合い、未来に生き抜く英知、自らの生活を処していく思考力、判断力、未来に生きる創造力を備え、社会に貢献できる児童の育成をめざしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・強く — がまん強くがんばり抜く強い意志とたくましい体力をもつ子ども ・正しく — 自己の生活に責任を持ち、自らの意志を正しく主張する子ども ・仲良く — 仲間意識をもち、自他ともに生かす子ども
<p>②下品野小</p>	<p style="text-align: center;">明るく楽しい学校</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 健康な体と強い心の子 2. よく考える子 3. 仲よく助けあい、よく働く子
<p>③天王小</p>	<p>自主的で創造力豊かな、心身ともに明るい健康な子どもを育成する。</p> <p>具体目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たくましい子（保健・体育の重視） ・助け合う子（奉仕・協力活動の重視） ・よく学ぶ子（自主学习・表現の重視）
<p>④元城小</p>	<p>自主的で人間性豊かな、心身ともに明るく健康な子どもを育成する。そのために、めざす児童像をつぎのように設定する。</p> <p>ア 健康でたくましい子 イ 豊かな感情と、実行への勇気をもつ子 ウ よく考え、進んで学ぶ子 エ なかよく助けあう子</p>
<p>⑤岡崎小</p>	<p style="text-align: center;">本校のめざす児童像</p> <p>みずから学ぶ子……自分で計画し、自分から進んで勉強し、最後までしぼ う強くやりとげる子</p> <p>心の豊かな子……しなやかでたくましい心を持ち、さらに親切で礼儀正し い子</p> <p>体のじょうぶな子……自分の健康は自分の手で築き、いろいろな困難にも耐え ていく子</p>

も同様であると考えられる。なぜならば教育基本法第1条、教育の目的としての「心身ともに健康な国民の育成」と結びつけて考えれば当然の結果といえる。けれども殆どの学校で同じように健康を教育目標に掲げていても、それをいかに日々の学校教育活動に具現化するかは学校によりかなりの相違がみられる。いかに立派な教育目標を掲げていてもそれが実践されなければ、単なる飾りも

ので何ら価値がないといえる。こうした意味において、今回の各表彰校は教育目標を一步掘りさげたスローガンをつかって日々の教育実践に活かしている（表4参照）。

表4 . 各健康優良学校のスローガン

①花 山 小：自ら進める健康の歩み
②下品野小：「心と体の姿勢づくり」 土に学ぶ教育
③天 王 小：たくましさを育てる天王教育 「自分のからだは自分の手で」
④元 城 小：心豊かでたくましい子を育てる 元城教育 自ら進める生活づくり
⑤岡 崎 小：健やかな心と体 自分の健康は自分の手で —地域ぐるみの健康教育—

以下、こうしたスローガンのもとに、各表彰校がいかに具体的な健康教育活動を推進していったのかを、各表彰校が開催した「健康教育発表大会」の資料をもとに検討してみたい。

(言葉づかいの相違および名称は各校で使っているそのままを用いた)

2) 体力づくり的な活動 特別時間を設定しての活動は、授業前の朝のマラソン(花山小)、朝の自主トレーニング(下品野小)、元城走行(元城小)、おはよう運動(岡崎小)、授業の間にやる業間体育(花山小、下品野小)、天王体操・太陽の時間(天王小)、健康体操・ひまわりタイム(元城小)などがみられ、その運動はランニング、各種運動のローテーション、なわとびなどである。また、体力づくりのための環境づくりとしては、花山ランド・鍛錬コース・日本一周板(花山小)、プレイランド・レインボールーム(下品野小)、天心ランド・体力測定室(天王小)、元城タワー・ひまわりセンター(元城小)、岡小ランド・健康センター・保健体力コーナー(岡崎小)などの運動施設、場が保護者の労力奉仕により完成している。なお、学校にいる時だけの体力づくりではなく、家庭に帰っても習慣化されるような運動もみられ、「家庭体育の日」花山小、第3日曜日は

「汗する日」下品野小、「親子体力づくりの会」天王小が設けられている。これは児童のみでなく、家族全員と一しょに運動するもので、親子のふれあい、再発見など多方面の良い効果が生まれている。

3) 心の健康、心のふれあいを高める活動

全校児童による朝の鼓笛・全校音楽(花山小)、生活体験発表会(下品野小、天王小、花山小)、ふれあいの時間・懇談会(下品野小)、親子学級会(天王小)、テーマ集会・オアシス運動・ひまわりタイム(元城小)、朝の歌・全校児童集会・仲よし常会・ふれあい活動・岡小タイム(岡崎小)など詳細は記せないが体力づくりに劣らず各校意欲的に取り組んでいるのがわかる。これは新教育課程の根本である、学校生活の「ゆとり」の時間(学校裁量の時間)をすんなりそのまま効果的に活用している事例といえる。これらの活動も単に学校内だけにとどまらず、家庭での実践として、第3日曜日に「ふれあいの日」天王小を設定したり、家庭との「声のたより」をカセットテープで交流したり(岡崎小)、また地域との結びつきとして「お年寄を招く日」天王小まで設けている。学校給食についても、小規模校ならではの全校会食(花山小)、黒板にカーテンをひき、テーブルクロス・ワゴンを整えての親子会食、他学年への訪問給食、通学団給食(以上元城小)、訪問給食・招待給食・屋外給食(岡崎小)などの工夫もみられる。

4) 勤労体験的活動 「愛校日」を設けての学校環境美化活動(花山小)、一人一鉢・粘土工作(下品野小)、実習田(天王小)、元城菜園(元城小)、岡小農園などで実習し、実ったものを「七夕まつり」、「収穫祭」、「もちつき大会」などの催しを開いて労働の意義を楽しい体験として育てている。また清掃についても「たてわり」といわれる学年を超えたグループにより実施している学校(元城小、岡崎小)もみられた。

5) その他の注目すべき活動 わが家の「保健の日」の設定(花山小)、近視予防・矯正のための遠望訓練・目の体操、うす着の励行、給食後のはみがき、はだしの運動、安全運動など健康生活を高める活動も多い。とくに学校保健委員会は十

すべての学校で年5～6回以上は開催されており、学校側の職員・児童はもちろん、校医団、PTA、学区の諸団体など多くの参画が得られている。ここで注目すべきは、ただ開催回数が多いということではなく、この会で話しあわれたことが、下部組織あるいは横に関連するいろいろな分野で実践に移されていることである。岡崎小のPTAを例にとれば、保健・体育・生活補導・新聞・図書の5つの専門部を設けて、児童の心身ともに健やかな成長を願って、家庭・地域社会の保健活動、体力づくりに積極的に取り組んでいる。

以上、それぞれの学校が意欲的に実践している活動の一端を紹介したが、それらの成果が認められるに至ったのは、やはり日常の地道な積みあげによるものである。また事例にもあるように、学校側の一方的な教育作用のみでなく、児童をとりまく家庭、地域の協力がいかに不可欠なものであるかが再認識される。ではなぜ各表彰校が健康教育に取り組むようになったのか、どのようにして家庭、地域との連携がとられてきたのかについてふれてみたい。

3. 各表彰校の健康教育取り組みへの動機およびそのあゆみ

①花山小の場合 創立は明治5年学制発布の翌年、明治6年と早い。戸数200戸ならず、三河山間部のへき地一級指定校である。全村山に囲まれ山に生きた地域であったが、昭和42年から西隣のトヨタ自動車関連工場の進出により兼業農家が殆んどとなった。また家庭の主婦も工場に出かけるようになった。そうした情勢の中で昭和45年から学校花壇によるフラワーブラボーコンテスト（FBC）、子ども貯金（銀行）、交通安全活動により全国的、全県的表彰を受けるなど教育活動は盛んであった。そして「地域即学校」といわれるほどに学区民との強い連帯が生まれた。これらの活動は子どもの健康問題にも当然早くから目を向けられた。とくに「花山の子は身長・体重とも県平均より1年分成長が遅れている」という事実からその改善に対して取り組まれた。第1になされたことは運動具設置、業間体育、健康教育の取り組みであった。「私たちの歩いた大筋は、日頃接し

ている子どもたちの生活を見つめて、そのなかから子どもの健康の問題をとりあげ、その問題について健康管理をどうしたらよいかを考え、尚掘り下げていくうちに、健康教育は、社会全般に配慮しなければならないことを知りました」そのためには「学校も、家庭も、地域も、『この子どもたちの幸せのために』総力をあげて学区全体の中に組織立て実践し」ていった。そして、「子どもたちが変容して一層強く歩み続ける姿、言い換えれば、どのような環境になっても崩れない生活のしかた、生きかたを子どもたちが身につけて欲しいという願い」がこめられていった。

②下品野小の場合 同じく明治6年の創立で、100余年の歴史をもつ。学区は1700戸、「土と火のまち」として「せともの」といわれる陶磁器産業が有名である。その反面、環境汚染もひどく「白い川白い町」と称されたように川は白濁し、町は陶土、土砂を運搬するダンプカーの砂塵で白ずんだ。また燃料とした石炭の煤煙も多く、結核の罹患率が高かった。川の白濁は陶土のためのみと思われていたが、ガラスの原料や鋳物の成型原料となる超微粒子の珪砂による工場廃水がつきとめられるにおよんで、呼吸器疾患としての珪肺病患者も増した。産業衛生、労働衛生としての工場従事者に対する指導はなされても、一般市民に対しては通常健康診断受診の奨励しかなされていなかった。ここにいたり、近年いくたの改善がなされ除々によくなってはいても、瀬戸に育つ人の健康指導の必要性がとりあげられた。とりわけ学校教育における保健指導の必要性が芽生えたのは当然であった。とくに昭和46・47年の市の研究指定を足がかりに8年の積み重ねによる成果が開いたことになる。その下地として、FBC受賞や、全日本よい歯の学校連続8年受賞という地道な活動もみのがしてはならない。

③天王小の場合 昭和49年、過大規模校の解消を図るために新設された学校で、着任した教師たちは「天王の歴史はこれより始まる」、「よりよい校風樹立の基盤は私達がつくるのだ」という気概に燃えた。しかし、児童たちの毎日の生活のリズムはほぼ同じで、何となくやっている、やらされている、人の力を頼りにしているといった無気

力で行動意欲に欠ける面がみられた。そこで、生命尊重を基盤とした、健康でたくましく意欲的な行動のできる子の育成を願った。そのためにはまず体力づくりを手がけたが、いまだ受動的であった。52年には「自分のからだは自分の手で」を合いことばに、積極的・意欲的な体力づくりを図り効果が得られた。そして53年度は、健康とは体力づくりだけでなく、生活の充実も考えるべきとし、「自分の生活は自分の手で」をテーマに児童の組織活動を活潑にし、自分たちの生活をきりひらいていく力を養うよう学校、家庭で取り組んだ。そして、「学校保健は、健康な生活のあり方を教える育てるとともに、進んで健康づくりに励む意欲を子どもたちに持たせるものでなければならない」という共通理解が生まれた。

④元城小の場合 昭和47年、大規模校から分離、校区は市役所をはじめ官庁、商店が集まり、また交通の中心としての古くからの町である。とくに自営業の家庭は夜遅く朝も遅い、従って朝食ぬきで登校する児童が少なくなかった。開校当初の健康診断で体位が県平均を下回り、体力では筋力、柔軟性が劣り、姿勢の悪さも目についた。生活面では基本的な習慣ができていない、根気や活気がない、協調性も欠けるところがみられた。これらは、放課に運動場の真ん中を使って遊ぶ児童が少ないという特異な姿として表れた。教師も保護者も、何よりもまず「たくましく生き生きした子どもにしないで」と願った。昭和47～49年度は十分整わない施設の中で健康管理センターの指導を展開、成果は「全日本よい歯の学校」として後年3回受賞している。昭和50～52年度は意欲的な体力づくりを求めて学校、家庭一体となってさまざまな試みがなされた。昭和53、54年度は「心の健康とは何か」を問いかけはじめ、それを「たくましさ」としてとらえた。それは健康で丈夫な体という身体面のみでなく、物事にくじけず立ち向かう積極性、心の豊かさとの心身両面にまたがるものとしてとらえ、その育成を学校保健活動を軸として学校教育全般で実践してきた。そして、「わたしたちは、健康教育をすべての教育活動の基盤として考え」るようになった。

⑤岡崎小の場合 明治6年開校、城下町から南

に離れた校区でありながら、古い伝統をもつ。大正14年には「体操指導日本一」として全国に認められるなど、スポーツ振興と健康教育に対する関心は極めて高かった。また合唱コンクールでも全国レベルの実績を数々残し、校内は一日中歌声に包まれている。他校と違って特別な健康問題があつて取り組み始めたわけではなく、古い伝統のもとにこれまでの健康教育の定着をはかった活動といえる。その活動は知・徳・体の調和のとれた人づくりをめざし、「しなやか」で「たくましい」心身の児童を育成することをめざしている。とくに歌声活動をとりいれた情操教育を核とした健康教育を展開しつつ、体づくり・心づくり・安全指導・ふれあい活動・ぐるみ運動の五領域を計画的、組織的に実践している。

まとめ

健康優良学校表彰の意義としては敗戦後の混乱からいかに早く学校教育を立ちなおらせるかにあつた。それは次代をになう児童の育成を考えれば緊要であつた。またより重要な意義は、日本の学校教育にはなかつた健康を教育するという全く新しい教育理念を、中央からの指導のみでなく、各学校現場に意欲的に取り組ませていったことである。それにより各学校は教育基本法をそのままもってきたような無味乾燥な教育目標を考えなおし、具体的に日々の日常生活に実践できるようみくだいたり、または児童に自主的に取り組ませるような姿勢も生まれた。しかし、健康教育の成果は一朝一夕にあげられるものではなく、長い積み重ねが必要である。今回の5小学校のうち3校は学制発布直後に創立した古い学校であるが、以前からFBC、よい歯、合唱コンクールなどに優れた実績もあり、それなりの下地があつた学校である。またあとの2校はマンモス校から独立した歴史の浅い新設校ではあるが、そのためにかえって進取の気運が高く、積極的な学校づくりの姿勢が榮譽に輝いたものといえる。しかし、こうした表彰制度に問題がないわけではない。とくに中央に応募する段階ともなればその学校は準備、雑用におわれ、子どもを中心とした実際の教育活動がおろそかになることも考えられる。また表彰制度が過度

にエスカレートすれば、学校が抱えている健康問題を地道に改善しようという活動より、受けのよい、ユニークさを前面に出した活動にはしる危険性も心配される。学校における日常の健康教育を推進し、その成果が積みあげられた結果がいつのまにか健康優良学校に選ばれるという状態がもっとも望ましい。なお、今回の表彰校も健康問題がまったく無かったわけではなく、表彰はひとつの区切りとしその後も新たな健康問題に取り組んでいるのが現状である。

〔注〕

- (1) 「昭和51年度、年報、健康優良学校児童」
全日本健康優良学校児童表彰会・朝日新聞社
(発行年月不明)
- (2) 石川道雄：「学校医30年」，東山書房，
1977， P. 44.
- (3) 松井利幸ら：「教育目標の分析—小学校について—」，第16回東海学校保健学会講演集，
1973.
- (4) 鈴木彌幸：「学校教育目標にみられる健康に関する分析」，愛知教育大学体育教室卒業論文
1975 (未発表)

〔引用資料〕

- ①花山小学校 昭和57年6月8日
 - ・「自ら進める健康の歩み」
 - ・「全日本健康教育発表大会開催要項」
- ②下品野小学校 昭和53年10月13日
 - ・「息吹く下品野の健康教育，研究紀要—心と体の姿勢づくり—」
 - ・「全日本健康教育発表大会大会要項」
- ③天王小学校
 - ・「たくましさを育てる天王教育，自分のからだは自分の手で—生活のリズムに目を向けて—」
昭和52年12月9日
- ④元城小学校 昭和55年6月4日
 - ・「心豊かでたくましい子を育てる元城教育，自ら進める生活づくり」
 - ・昭和54年度実践記録「心がふれあう行事活動」

- ・全日本健康教育発表大会「大会要項」
- ⑤岡崎小学校 昭和56年6月2日
 - ・「健やかな心と体—自分の健康は自分の手で—地域ぐるみの健康教育」
 - ・昭和56年度「健康教育発表大会要項」